小さなツバメはかわいそうな気持ちでいっぱいになりました。「あなたはどなたですか」ツバメはたずねました。「わたくしは幸福の王子だ」「それなら、どうして泣いているんですか」とツバメはたずねました。「もうぼくはぐしょぬれですよ」「まだわたくしが生きていて、人間の心を持っていた時のことだった」とぞうは答えました。「わたくしはなみだというものがどんなものかを知らなかった。というのはわたくしはサンスーシの宮でんに住んでいて、そこには悲しみが入りこむことはなかったからだ。昼間は友人たちと庭園で遊び、夜になると大広間でダンスをおどったのだ。庭園の周りにはとても高いへいがめぐらされていて、わたくしは一度もその向こうに何があるのかを気にかけてことがなかった。周りには、ひじょうに美しいものしかなかった。家来たちはわたくしを幸福の王子とよんだ。実さい、幸福だったのだ、もしもかいらくが幸福だというならば。わたくしは幸福に生き、幸福に死んだ。死んでから、人々はわたくしをこの高い場所に置いた。ここからは町のすべてのわるいこと、すべての悲しいことが見える。わたくしの心ぞうはなまりでできているけれど、泣かずにはいられないのだ」「何だって。この王子は中まで金でできているんじゃないのか」とツバメは心の中で思いました。けれどツバメは礼ぎ正しかったので、こじん的な意見は声に出しませんでした。「ずっと向こうの」と、王子のぞ